新教育課程の実施に向けて 自校の取組を見直しましょう！

西部教育事務所（H30.10）

各学校では、新教育課程の完全実施に向けて、自校の教育課程を見直したり、学力向上対策を改善したりしているところと思います。

本リーフレットでは、学校訪問の様子や全国学力・学習状況調査の結果分析等（「せいぶ148号」参照）を踏まえ、「学校運営」、「授業改善」、「生徒指導」の三つの視点で今後の取組についてまとめました。これらの取組を参考にして、新教育課程の実施に向けて、自校の取組を見直していきましょう。

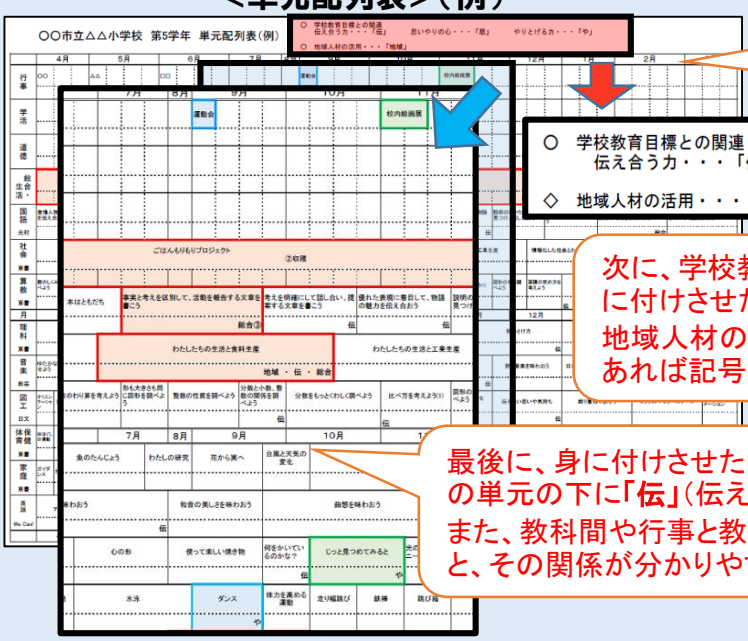
学 校 運 営

⇔ 学校質問紙　小：16～19、33、81、83　　中：15～18、32、78、80
（注：質問紙の番号は、国研の分析で学力と正の相関が見られた質問の番号です。）

全職員が教育課程全体を理解し、PDCAサイクルを機能させて編成、実施、評価していきましょう

○　教科横断的な視点で教育課程を確認できる単元配列表等を確認することにより、年間を通じて重点的に指導すべき内容や時期を確認できます。

＜単元配列表＞（例）



まず、教科、道徳、学活の他、行事なども含め、一年間の流れが分かるように、単元名等を書き入れる。

○　学校教育目標との関連
伝え合う力・・・「伝」　思いやりの心・・・「思」　やりとげる力・・・「や」
◇　地域人材の活用・・・「地域」

次に、学校教育目標や学校課題を基に、一年間で身に付けさせたい力を精査し、記号化する。
地域人材の活用など、他に書き入れておくとよいことがあれば記号化する。

最後に、身に付けさせたい力をどの単元で重点的に指導するか精選し、その単元の下に**「伝」**（伝え合う力）などと書き込む。
また、教科間や行事と教科の間で関連がある場合は、同じ色で囲んでおくと、その関係が分かりやすくなる。

※　*上記の単元配列表（例）は、西部教育事務所のホームページにアップしてありますので、ご参照ください。*

○　子供たちに関する調査や各種データに基づき、教育課程を編成、実施、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立しましょう。

全国学調の質問紙を分析したら、本校は「自分から進んで課題に取り組んでいる」という割合が少ないんです。学校で捉える姿と子供との意識に、どうしてこのようなギャップがあるのでしょうか？先生方は、どう思いますか？

子供たちはまじめに取り組んでいるけど、「進んで」取り組んでいるかというと、そうでもないかな。

「進んで」取り組めていないということは、めあての内容や提示の仕方がよくないのではないでしょうか。子供たちがもっと考えたいという思いをもてるように、工夫をする必要があると思います。

授業だけではなく、学校行事も見直す必要があると思います。決まったことをやらせるのではなく、子供たちに計画から考えさせて、もっと達成感を味わわせることが必要だと思います。

それでは、授業の中で、もっと子供たちが主体的に取り組めるように、めあての提示の仕方を工夫していきましょう。どのような提示の工夫が考えられるか、後で紹介し合いましょう。

授業改善に加え、学校行事などでの子供の取組も振り返り、教職員全員で教育課程全体を見直すことも大切です。

授業改善

⇔ 学校質問紙　小：13、22、26、65　中：13、21、25、62
児童質問紙　小：55～57　中：52～54

単元（題材）全体を見通して 1時間ごとのつながりを意識して指導しましょう

○　単元（題材）全体を通して身に付けさせたい力を明確にし、その達成に向けて１時間ごとの授業があることを意識して、まとめ・振り返りが次時につながるようにしましょう。

これまで、西部教育事務所ではめあてやまとめ・振り返りについて、右の①～④をお願いしてきました。

①授業の導入でめあてを示し、終末でまとめをするようにしましょう。
②問いのあるめあてになるようにしましょう。（How、Whyのめあて）
③めあてとまとめに整合性をもたせましょう。
④視点を明確にして振り返りをさせましょう。

また、子供たちに課題意識をもたせるために、めあてを設定するまでの活動で
- **本時と関連する既習事項を尋ねたり**
- **前時までの学習と違うところを問いかけたりして**

本時の課題を解決したいという思いをもたせることをお願いしてきました。

＜まとめ・振り返りを次時へつなげる＞

【1時間目】〇めあて ◎まとめ □振り返り → 【2時間目】〇めあて ◎まとめ □振り返り → 【3時間目】〇めあて ◎まとめ □振り返り

単元全体を通して身に付けさせたい力へ

「自ら考えてみたい」「自分たちで解決したい」という思いをさらに子供たちにもたせるために、**単元（題材）全体で身に付けさせたい力の達成に向けた1時間ごとの授業になるよう、つながりを意識して授業を組み立てる**ようにしましょう。

＜つなげるための教師の働きかけ＞（例）
- 本時でまとめたことを基に、さらに追究したいことや発展的に考えたいことを問いかける。
- 本時で身に付けた技能で不十分な点はどこか、また、その改善には何をすればよいかを個々に考えさせる。
- 単元の導入で出た疑問を模造紙等にまとめて掲示し、単元で解決すべき課題について見通しをもたせる。

生徒指導

⇔ 学校質問紙　小：12、23～25、30、52　中：12、22～24、29、50
児童質問紙　小：1～6　中：1～6

子供たちの自己有用感を高めていきましょう

「自己有用感と学力は正の相関関係がある」（全国学力・学習状況調査報告書より）

○　子供たちのよい点や可能性を見付け、自己有用感を高めるようにしましょう。

子供たちの自己有用感を高めるためには、子供たちの自己決定の場があり、一人一人が自分の考えなどを表現する機会が保障されていることが重要です。また、一人一人の発言などを教師も友達も受け入れる学級風土が築かれていることが必要です。

＜教師の働きかけの例＞
- 子供たちから出た意見や考えを授業の中で少しでも生かし、学級全体の学びに貢献したという実感をもたせる。
- 教師が想定していなかった考え方にも耳を傾け、同じように考えた子や、その考え方が分かるという子がいるか問いかける。

⇒ ***学習規律を身に付けさせるためにも、子供たちがよくできたことは、声に出して評価してあげましょう！***

○　集団での達成感を味わわせ、個の意欲や成就感につなげましょう。

教科の授業だけでなく、道徳や学級活動、児童会（生徒会）活動なども含めた教育活動全体で達成感を味わわせましょう。
個の成長と集団の成長を相互に作用させていくことが重要です。

＜学校全体で取り組むべき課題＞
- 行事等を通して、集団での達成感を味わわせ、それを授業での活動にもつなげるようにしましょう。
- 中心となった子供のリーダーシップを評価するとともに、その子も含めたすべての子供を評価し、個の意欲や成就感につなげるようにしましょう。